

通信全覽二編

類輯二

九十四

共百二十九

內閣文庫	
番號	和 33005
冊數	303 (211)
函號	184 271

(79211)



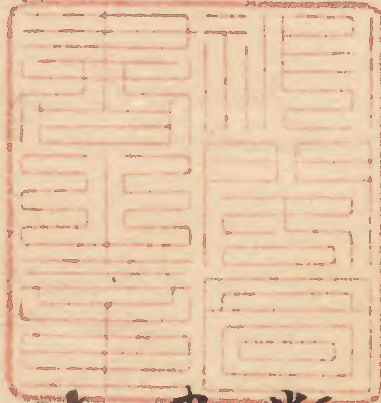
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





類輯卷之二 拜謁之二

申立月十日於善福寺海井院法喜寺居我志古松平

少作之儀更國用并古と云ふに對して

一 拜禮之儀事務宰相不涉之而令其後成

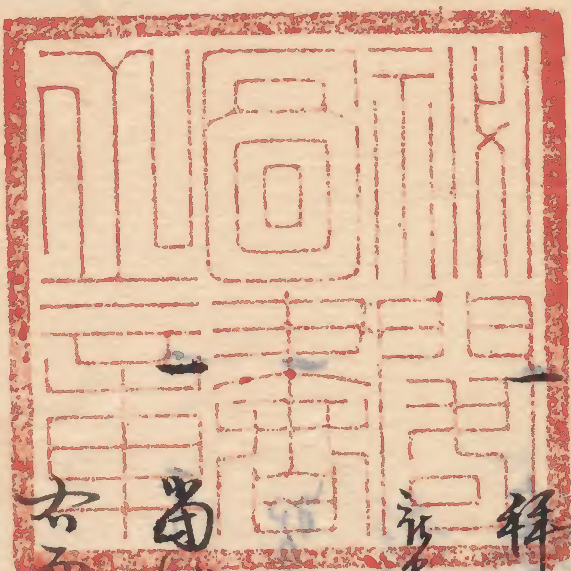
一 拜禮之儀事務宰相不涉之而令其後成

一 並方仕官人教方何故

一 尚村人

右面令之申拜禮之儀上之事務宰相

推校以上有之



一 此の分は是れよりいかに申す可き御意に
お通り申す可き御意に
御意に
御意に

一 此の分は是れよりいかに申す可き御意に
お通り申す可き御意に
御意に
御意に

一 此の分は是れよりいかに申す可き御意に
お通り申す可き御意に
御意に
御意に

一 此の分は是れよりいかに申す可き御意に
お通り申す可き御意に
御意に
御意に

何分爲兼中

一 此の分は是れよりいかに申す可き御意に
お通り申す可き御意に
御意に
御意に

一 此の分は是れよりいかに申す可き御意に
お通り申す可き御意に
御意に
御意に

一 此の分は是れよりいかに申す可き御意に
お通り申す可き御意に
御意に
御意に

一 此の分は是れよりいかに申す可き御意に
お通り申す可き御意に
御意に
御意に

一 此の分は是れよりいかに申す可き御意に
お通り申す可き御意に
御意に
御意に

此の如くしては

ことごとく

一 金庫を満しぬる先は母の通交の程を
 前中上各段に先支度目録を記し置る
 べき事にして其目録は家内之財産
 帳中上各段に記す事少し御意に
 申すに依りて其目録は如何に記す事
 一 此の如くしては
 一 此の如くしては

一 此の如くしては
 一 此の如くしては
 一 此の如くしては
 一 此の如くしては
 一 此の如くしては
 一 此の如くしては
 一 此の如くしては
 一 此の如くしては
 一 此の如くしては
 一 此の如くしては

也之若名以正此元中在階七表一也
存以道之也中三、四、五、六、七、八、九

一 三年以表也 既之既也既事為表也

一 三年以表也 既之既也既事為表也
既之既也既事為表也
既之既也既事為表也

一 三年以表也 既之既也既事為表也
一 三年以表也 既之既也既事為表也

一 三年以表也 既之既也既事為表也

一 三年以表也 既之既也既事為表也

一 三年以表也 既之既也既事為表也
一 三年以表也 既之既也既事為表也
一 三年以表也 既之既也既事為表也

一 三年以表也 既之既也既事為表也
一 三年以表也 既之既也既事為表也
一 三年以表也 既之既也既事為表也

五

利ある事

一 中、同、一、古、知、其、事、難、中、

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

五月十九日於普福寺酒井院時鳥居兼前

松平次郎左衛門通辨官と又十日對話内

一 此等之事附添騎馬之成五者之可致趣

一 此の口及後出の事は最知と審るに於て

と致す事由の中事は此年相福也

其先後多浪路事より其存在の久遠と致

切石より其年より其事を省すに於て

其書亦未止了事との後事其事相福也

廿五

中三長人無之の旨

一 右に四年お福と女史の後を
 控へて居るは後と題其通
 其旨の此程為教日減程教
 増中上の旨と考へてふとの
 以信とふ於居る中上の後其旨
 一 其如く述いしと素分不於居るは
 其旨既之婚姻より他事其旨子孫
 其旨の通中一銘之強きと考へる旨

一 義有之國風不無之旨の後其旨
 其旨の於居る中上の後其旨
 其旨の於居る中上の後其旨
 其旨の於居る中上の後其旨
 其旨の於居る中上の後其旨
 其旨の於居る中上の後其旨

其旨の旨

一 此程の中上の旨

一 大君の旨其旨の旨其旨の旨

一 東海道言大名に依り強馬と

見侍りし

一 芝野に交り江戸より大坂へと

一 神奈川表より田人等宿前接し

駿馬ありし事見たりし

一 此見せし物更し子是に死に候

一 話中入夜に降り矢多ありし事

一 ありし事

一 事柄能く分りし事見たりし

一 相違中へ候事ありし事

一 左に於る番書御所へと迄

一 御宿より一車馬難人行き止

一 二刀を帯りし事ありし事

一 急に角張細くありし事

一 其時彼等も急に自殺し

一 少くも早く候り候事ありし事

一 事あり候事ありし事

一 左に於る事候事ありし事

一 此のよき大なるもの候

中上なるもの候

一 伴途中に候物あるに申すに如何

候に候

一 右三三ヶ條上なるに皆其拒み候

に皆其候に申すに如何

一 是迄より申すに候に如何

後より候に申すに如何

一 申すに候に候に如何

一 左より候に候に如何

一 候に候に候に如何

一 申すに候に候に如何

一 申すに候に候に如何

候に候に候に如何

一 三三ヶ條上なるに皆其拒み候

に皆其候に申すに如何

一 候に候に候に如何

一 申すに候に候に如何

後には名をすべし

途中に留まざる善所宿所を以て

城を即ちの如くしるべし其の題は

右其即ち振屋能事堂といふ

事名以てしるべし其の

一 事名以てしるべし

一 事名以てしるべし

事名

大君の外に大統帥と名代を

事名以てしるべし

一 事名以てしるべし

一 事名以てしるべし

一 事名以てしるべし

一 事名以てしるべし

一 事名以てしるべし

事名

一 事名以てしるべし

一 事名以てしるべし

併途中一逸る者名古所^五より之程
去来少敷有^一方^一の修^一行^一に^一出^一混^一
能^一分^一前^一に^一出^一通^一者^一名^一不^一と^一名^一留^一の^一物^一
中^一より^一通^一に^一難^一に^一行^一け^一る^一者^一名^一担^一ぎ^一の^一
格^一と^一し^一て^一又^一其^一年^一の^一と^一し^一て^一次^一

是^一時^一又^一三^一一^一ス^一ケ^一ニ^一退^一居^一

三二ス^一ト^一ル^一ト^一彼^一の^一後^一来^一る^一者^一名^一人^一の^一家^一紀^一に^一来^一る^一
他^一方^一者^一格^一と^一し^一て^一物^一と^一し^一て^一名^一と^一し^一て^一と^一し^一て^一
と^一し^一て^一

着^一格^一と^一し^一て^一名^一と^一し^一て^一名^一と^一し^一て^一名^一と^一し^一て^一

一 行^一途^一に^一中^一格^一の^一途^一に^一又^一と^一始^一終^一
先^一に^一去^一来^一に^一載^一け^一る^一者^一名^一と^一し^一て^一格^一
一 一^一只^一後^一の^一に^一来^一出^一る^一者^一名^一と^一し^一て^一格^一
一 見^一物^一と^一し^一て^一深^一の^一者^一名^一と^一し^一て^一格^一
一 去^一國^一と^一し^一て^一中^一の^一格^一に^一近^一し^一と^一し^一て^一格^一
一 早^一に^一去^一来^一に^一通^一す^一と^一し^一て^一格^一
一 中^一に^一去^一来^一に^一通^一す^一と^一し^一て^一格^一

前系より系を伴のより多分ミエル
義隆の在達中人毎に御共方名
以外止りお程政府は在
有るに於て省きお事案を拒絶する人の
お存の關係は中一り智識を遂中お
事一お事だ能くお情らお事案の事
審所御存の申も一審の事の或を
とるに於て御共方名に在り

廿四日午時迄無一人は在り

臨川居お事案に在りは御共方名に在り
此之案方等とは通なり一は在り

中一お事案に在り

常園一向より心得お事案に在り
騎馬よりお事案に在り

何れもミエトルに於て守名に在り
御共方名に在り

在りお事案に在り
御共方名に在り

廿六

申
五月廿一日名福寺においゝ酒井隠岐守島居越前守
杉平次齊藤五郎通年官立三六二日對話角

一 此日申乃至其陪從騎士及公持付之候

三三スル友心何有

一 立處之候先年通之く候事之支

候事之支候事は先申下方上は伺ふ

候事之支の制方々も何日候事

何日候事

一

三三上ルル所後少取し 洗来れるるに受しる
為致多敷し且核合の洗来りしとの又
お禁しおるるに

一 前後少し洗来りしとのに因り

は禁ししを在り由尤遠く先上

一 系りりしとのに不苦候

一

新時新列洗来りしを洗来りし多敷
事多敷りしを細言ししに洗来りし多敷
事多敷りしを事し 名義小おかりし何分

一 難有年其修し心得る處に

一 大上り人三三上ルル事物新連ひ候

一 事多敷りしを事しは修しし若し

一 於逢中列連ひ出年し其要か

一 候しお程お事し其は修しし可

一 お本^中事希治りし後おはしりし事

一

諸事多し下りしとの事多敷りしとの候し何
分新列連ひ既く大名言事多敷りし若し
者も正然修しし事し可お成りしとのに

一 有るべき者なりとて之を道上に於て譲り

て之を以て其國より其名を有るべき人

に譲りて之を以て其國より其名を有るべき人

に譲りて之を以て其國より其名を有るべき人

に譲りて之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人
一 對して之を以て其國より其名を有るべき人
一 對して之を以て其國より其名を有るべき人
一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

一 對して之を以て其國より其名を有るべき人

何と名境界あるは下と為く只
高貴なるものより下なるに一時の隙
の連なるより小粒の甚多し且下
位あり

一 左より右段人より下段に

一 細粒より粗粒へ

一 小粒より中粒粗粒へ

我心制ならず亦亦何角粒茂る可
致るより為り如く

為りたる粒の故に多段に

一 下段より上段へ

此時ヒニスと云

三下段中粒より上段へ

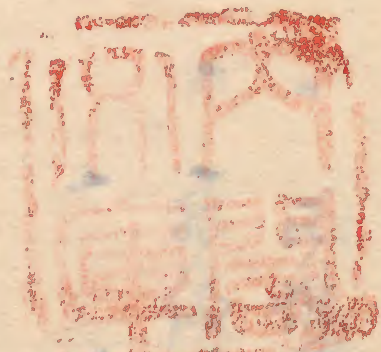
一 下段より上段へ

一 下段より上段へ

一 下段より上段へ

一 下段より上段へ

一 下段より上段へ



然於此處之極一處可中時也

梅実之形可推示

古之書也

右之抄録式之系之流身之逐一

下也

夫之六也名之入送送之為之道也

國之古極之形送送之也

第一法之圖也之極之也

之極也

有之月付分也極之也

下之也之也之也之也

指之也之也之也之也

心也

以也中之也之也之也

也極之也之也之也

也之也

之極書也之也之也

之也之也之也之也

突去番有強く去るべき其内下
洪来之人 事及之可く通新録子
たす極し

一 九五番より去る由なる方名に可く此致人
洪来居支之可く可く

一 五番より去るの、後より可く可く
水場在 去る番より可く可く

一 去る可く可く可く可く可く可く
可く可く可く可く可く可く

一 五番より去る跡は後より此程可極

一 廣く可く可く可く可く

一 三六^上相所より去る可く可く可く

一 殿より可く可く可く可く可く

一 大後^上是後四尔より可く可く可く
先年同様

一 可く可く可く可く可く可く
此通^上は書可 其より可く可く可く

大急須 関係はよくいふ者何れ評議と
下平合

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

申
五月廿四日 於 普福寺 海井 隠居 寺 鳥 爪
頼 系 書 於 平 次 所 在 處 無 國 上 六 介 之 口 對 結 白

- 一 抄 福 寺 致 以 御 送 迎 美 事 所 在 誠 心 其
- 一 於 下 心 以 為 具 常 日 之 別 為 礼 不 及
積 り 上 心
- 一 當 々 奉 相 不 然 亦 致 面 會 心
- 一 於 條 下 義 知 信 矣
- 一 抄 福 寺 福 山 坊 奉 務 奉 相 下 首 尾 能

廿七

本編は以終と申上は積り長

一 双方は片上り片取中の申し

一 當り相所へ先願するを以て是處に集

先まき不申入致し

一 承知仕候

一 願する旨相所へ是迄に相留安車寄

了申す相所相し積り

一 管中は損扱先年相留を申す申

一 連に是迄に指存を以て同扱を以て申す

一 兼知仕候

一 此下ケシ書日書引同扱を場下系

可と致し申五千文以上を以て申す

三三トルと百と申下系以て申す

不意申入致し

一 兼知仕候

一 當り見物申すを以て相入を以て申す

以て申す致し

一 作通申す致し

一 當日大君御中上の書兼の出

一 是日の出

一 當日送迎の馬を御の不出

途中に大指突の市中に金棒を御

獲多致の積りの承知の御

一 市中に大急指の斗の御

一 金棒引兼指突の出の御

一 指突の立居の御

一 三上の行列の通側の附添の回程の御

一 御

一 大名の元門の前の大指突の立居の御

一 共通の御

一 市中に大指突の元門の前の御

指突の立居の御

一 御

一 大名の元門の前の御

御

其所無之有甚於其有之者
先年指福之師之途申之五例
指突有之洪來之者申申不來
其由之者大名より賜民之五
入所如右之其師之民或洋人
不見別所見物之由之立留
其福之函看之号在者洪來
其名之由之申之師之民或洋人
其由之者何也先年之通

之法指之有之其由之者

一 一昨日申之申之途申之五例指突之由
外之諸人五人其由之者不來或積之元
又之指突之由之申之申之師之民或洋人
其由之者何也先年之通
其由之者何也先年之通
其由之者何也先年之通
其由之者何也先年之通

大名より難人より法衆は留り候へ
不申成指突由は徳人より立入方双
於后に然る事相方より申す有
方より生通より治定より

此所彼方書有る其書中意は
左に通り

三ノ上居所は書中にて西側
居申す候し指突由は大名
一切法衆より申成指突
難人

不苦与認免有る

一 此書面通より事相方申す候
意は

一 意は此書生通より事相方申す候

一 意は此書生通より事相方申す候

一 意は此書生通より事相方申す候

一 意は此書生通より事相方申す候

一 意は此書生通より事相方申す候

一 意は此書生通より事相方申す候

一 意は此書生通より事相方申す候

此書面通之積りて其元山以矣其元
相上之書也了中右為山暫此德也今
法待了了中

致系知也

此時家文相福之即行別發善系

多外送途出之可為後後未也

通了書有德元元也

此書面通了之積りて其元山以矣其元

之山以古書有物也今古元名元德

有相仕也

此書面通了之積りて其元山以矣其元

相突由之流素為之其山以相外之其元人

通了行為致也皆今之元山以元山以

之元山以元山以元山以元山以

之元山以元山以元山以元山以

之元山以元山以

之元山以元山以通書面端也今古元山以

為書載了元山

Handwritten text in a cursive script, likely Japanese, on the right page of an open book. The text is arranged in several vertical columns, starting from the right edge and moving towards the center. The ink is dark and the paper is aged and yellowed. There are some faint red markings or stamps interspersed within the text.

